

## 満洲コンテクストにおける異族同行物語

安部公房『けものたちは故郷をめざす』と今村栄治『同行者』を例に

謝瓊（アメリカ・ダートマス学院）

旅行文学がとらえるのは自己と他者の出会いの瞬間である。他郷で旧知に出会うのは求めて得られるものではない偶然であり、多くの場合、同行は旅行者が見知らぬ人、普通の生活では往々にして自分の世界に属さない他者と一時的に同盟を結び、共に旅程を完了する必要があることを意味している。ある特殊な境遇のなかで、同行者はひいては寝食を共にし、同じものに乗って共に往来し、その親密さは家族に匹敵するほどである。その結果、旅行者は他者と自己を分かち合うことを余儀なくされ、同時にまたこれによって自身を顧みることになる。植民地旅行文学においては、植民者と被植民者の遭遇をしばしば見かけることができる。日常生活の中では、植民者と被植民者は往々にして明確な階級秩序の中に身を置いている。しかし旅程においては、植民者はつねに被植民者の現地の人文地理に対する理解に頼って旅程を完了する必要があり、二種類の人物の出会い本来明確であった階級関係を複雑化し、それゆえ往々にして旅行者が自己と植民世界を再認識する契機となるのである。

このような同行物語は、日本によって植民統治され、多民族が共生する満洲国のコンテクストにとって特別な意味をもっている。満洲国は一般の植民地とは異なり、いわゆる「五族協和」の独立国家というカモフラージュのよりの植民統治であるため、その植民統治の階級関係はより複雑であり、より隠蔽性をそなえたものであった。各民族は満洲で通常はそれぞれ分かれて居住し、仕事場の同僚関係も接触が比較的限られており、植民者や一部の被植民者にとっては、日常生活の中で民族関係に対する本質的な反省に至ることは難しかった。そのため同行は、異民族の人々に不確定性に満ちた空間のなかで互いに深く理解させる数少ない機会となったのである。そしてそれは往々にして一種の意外な、極端な方法で、赤裸々に満洲国の複雑性と抑圧性を呈示し、また同行の旅程も植民者と被植民者の主人公が主体的に覚醒する心理変化の過程となるのである。日本人作家の安部公房による戦後の小説『けものたちは故郷をめざす』（1959年）と満洲国で日本語を用いて創作した朝鮮人作家である今村栄治の『同行者』（1938年）は、その典型である。

安部公房は一歳の年に両親とともに満洲へ渡り、奉天で小学校と中学の教育を受けた。1940年に東京に帰って高等教育を受け、その後1944年末に奉天に戻り、奉天で日本の敗戦と父親の病死を経験した。1946年に家族と引き揚げ船に乗って日本へ帰った。戦後、安部公房はその文学作品やインタビューのなかで、たびたび自らの満洲での生活の経験、とくに引き揚げの体験について言及している。1959年に発表した小説『けものたちは故郷をめざす』はフィクションの主人公である日本人少年の久木久三による引き揚げの旅程をテーマにしたものである。久三は敗戦の前は母親と巴哈林（パハリン）という北満の都

市で暮らしていた。母親は敗戦の混乱の中で病死し、久三はソ連兵に収容されて三年間を過ごす。しかし久三は一貫して日本に対する憧れを抑えることができず、ついに自分一人で帰郷の旅に出る。彼はやっとのことで南下する汽車に乗り込むが、汽車の事故のため高石塔という人物と荒野を歩いて越えなくてはならなくなる。寒さや飢え、高の裏切りや離脱など、度重なる苦難を経たあと、彼はとうとういわゆる引き揚げ船に乗り込むのだが、しかし思わぬことにそれは実は陰謀と暴力に満ちた密輸船であった。船上で彼は閉じ込められ正気を失った高石塔を目撃し、最後には高とともに閉じ込められ、船はおそらく永遠に日本に到着することはないのである。

この作品は敗戦後の引き揚げの旅程に触れているだけだが、実質的には作者の日本の植民史に対する全面的な反省に切り込む手がかりとなっている。小説の中で、主人公の久三は満洲国の主要な民族の構成員と深く接触しており、これらの接触は満洲国の「五族協和」のスローガンによる隠蔽のもと捻じ曲げられた、暴力的な民族関係を色濃く投影している。その中で、久三と高石塔の接触は最も深く掘り下げられており、二人の同行の旅程が小説の中心的人物関係となっている。つまり、もし安部公房の引き揚げ物語が日本植民史を再考した寓言であるとすれば、久三と高石塔の同行の旅はこの寓言の寓言であり、それは罪のない、まだ大人になっていない植民者による、植民世界で最も残酷な、最も罪深い一面との遭遇を語っているのだ。この遭遇には日本の満洲植民の複雑性、変態性、虚偽性が投影されており、また第二世代の植民者——久三や作者自身、彼の同世代を含む——が植民の真相に向きあい、不可解、驚愕、嫌悪から反抗へといたる心理変化の過程を語っている。残念なことに、この小説に関する先行研究では、久三と高石塔の関係について、とくに深く掘り下げて注目していない。

全編にわたって、久三は世渡りの経験が浅く、純真で単純な少年植民者の形象として描かれている。日本人ではあるが、彼は幼少から母親と肩を寄せ合って生活し、敗戦時には母を失って孤児となり、後にソ連人に収容されたおかげでやっとなり生き延びており、一貫して被害者の役を演じている。彼は日本へ行ったことがないが、植民地のイデオロギー教育のもと、極めて自然に自分は日本人だと感じている。さらにいわゆる日本という故郷に対して純粋な憧れを抱いており、教科書で見る富士山や日本三景、緑色の微笑の島を片時も忘れられずにいるのである。そもそも「この恋人にはまだ顔もない」にもかかわらず（28頁）。あるいは彼が日本で暮らしたことがなく、日本の現実を見ておらず、植民地のイデオロギー教育を通して母国日本の理想の形象を作り上げたからこそ、さらに愛情や憧れが強まり、典型的な植民愛国者となったのだ。すべての旅程において、久三は容易に周囲の人々に対して好感を抱いており、彼らと自然に親しくなっており、彼の姿からは一般に想像しうる植民者のマイナスイメージを見出すことは難しい。同時に、彼の過去の生活は基本的に植民都市の日本人居住地に限定されていたことから、彼の満洲の外界に対する理解は非常に限られており、至るところで他人の助けを必要とし、それではじめて旅程を完了できるのである。

久三とは反対に、高石塔は身の上から性格まで非常に複雑で、至るところで越境する超級の被植民者である。彼の日本語と中国語はどちらも流暢で、自ら母親が日本人だと言っており、最初は自分を中国人、後には朝鮮人だと言っている。つまり彼は植民者と被植民者が結婚した家庭の出身であるのだ。彼の生計の方法は、一貫してスパイの性質を持つ情報工作であったようである。彼が自分で言うところによれば、彼はかつて日本関東軍で情報工作をしていたという。彼は日本、とくに植民暴力を象徴する日本男性の気質に深い共感を抱いており、身に付けていた数少ない物品の一つに、以前に関東軍の日本人上司であった吉野博人が彼に送った『東海道仇討道中』という本があり、その本の扉には吉野が彼に贈った二行の言葉が書いてあった。「おれが男なら、君も男だ」（177頁）と。戦後、彼は今度は国民党で情報工作をしており、彼が共産党の汽車の情報を国民党に密告したために、彼と久三が乗っていた汽車が途中で事故に遭ったのである。このほか、高石塔はひたすら利益を追求するアヘン密輸入でもあり、久三に麻薬隠匿の手伝いをさせ、のちには久三になりすまして日本人の買い手に対応している。このような高石塔はまさに植民体系の中で生まれた奇形児である。彼は危険であるが自在に植民当時や植民後の世界における様々な民族・政党・利益集団を渡り歩き、植民者を模倣し、植民者を利用し、そこから最大限に個人の利益を獲得している。ただし最終的には彼よりさらに暴力的な日本の密輸入たちに見破られ、閉じ込められて発狂するに至っており、植民地権力を超えることはできなかったのである。

そのため単純で、善良で、愛国的な植民者である久三と、狡猾で暴力的で残酷な高石塔の同行は、久三がこれまで知らなかった、おそらくは無意識に知ることを望まなかった自身が属する植民体系の暗部に直面する瞬間になったのである。二人の最初の出会いは、久三にとっては美しい事情であった。彼は高石塔が日本語を話すことからこの上ない親しみを感じ、生きるか死ぬかの瀬戸際の同行によって彼に対する信用が生まれている。しかし高石塔の久三に対する様々な自分勝手な行為や連累によって、だんだんと久三は憎悪、憤怒、冷淡といった、久三少年にとってなじみのない感情を抱くことになる。高石塔が彼にヒロインを隠したチョッキを着せて麻薬を隠匿させた後は、彼は高石塔が自分をただ利用しているだけだと感じている。高石塔が安全な区域に入った後に久三を殴って気絶させ、久三の持ち物すべてを奪い去ったときは、久三は彼に対して恨み骨髓に徹している。しかし現地の在留日本人の収容所で門前払いされた後、久三は高石塔を懐かしみ始め、彼が自分を裏切ったことについて、常軌を逸した口実を探そうとするのである。

高は悪人かもしれない、しかし目的にむかってつき進む力をもっていた。いや、もしかすると、それほど悪人ではなかったのかもしれないのだ……たとえばその証拠は、噴水の中におき忘れていった、あのピストルである。彼はよほどあわてていたにちがいない。だが、なぜそんなにあわてたのだろうか？ ちょうどそのとき、犬が畏におちこみ、高はうろたえたのだ。彼はもともと久三をなぐる気などなく、曲者と思いがえて打ち倒し、すぐに気づいたのだが、畏の音におどろかされ、久三に

手当てを加える余裕もなく、とりあえずチョッキだけを持って逃げだした……そう、たしかにそういう場合も考えられる（224頁）

もしそれまでの久三の単純さや善良さが、久三個人の性格として、読者に反感を抱かせることなく、ひいては読者にこの人物に対する同情と愛情を感じさせたとしよう。ならば久三が無援のなかで頼りを渴望するあまり常軌を逸した口実を探し、自分を窮地に置いていった高石塔を好意的にとらえる心理活動は、いわゆるただただ悪と直面したくないがための愚かさを十分に示している。久三がどんなに高石塔を憎んだとしても、相手は彼が生きるための唯一の拠り所であるため、久三は自分の単純で善良な想像力を十分に発揮して、相手のために一切の悪行の言い訳をするのである。もし私たちが高石塔を植民体系の奇形児、植民の暗部の象徴とみなすなら、久三のこのような感情はもはや見知らぬものではない。すべての一般の植民者は日常生活の中で故意にか知らずにか植民体系を美化し、その悪の言い訳をしているのである。たとえその悪がすでに彼ら自身に波及したとしても。なぜならそれは彼らの生きるための礎石であり、それに対して命にかかわる依存心を抱いているからである。

しかし久三は偶然出会った日本人の大兼に密輸船に連れていかれた後、この唯一の自己欺瞞ですら維持できなくなる。作者は多くの紙幅を費やして船内環境の不潔や不審、船上の日本密輸者たちの冷酷や残虐を描写しており、これにより植民地の究極のディストピアの情景を表現している。しかし密輸船に乗ったばかりの久三は嬉しさに気をとられ、この船が夢にまで見た日本に自分を連れ帰るのだと思っている。だが彼が船上の至るところで行き詰まり、高石塔が極端に残酷な方法で機関室と船舷の間の狭い隙間で痛めつけられ、狂人のように満洲共和国の復活という妄言を語るのを目の当たりにした時、彼は突然周囲のすべてに対し、身体的な反感を抱くのである。

なぐりかかってくるようなエンジンのひびき、色がついているような熱気、刺すような高の口臭、そしてその間のびしたおしつけるような繰り返し……たまらなくなって、力ませにつきとばしてしまう。ホ、ホ、ホ、と他愛もない声をあげ、横倒しに倒れていった。足もとに罐を残し、あちらこちらにぶつかりながら、夢中で逃げ出していた。（256頁）

高石塔が旅程での強く猛々しいイメージから監禁され発狂するにまで陥ったことは、植民世界の最も歪んだ変態的な力による個人に対する破壊を、久三に生々しく示すこととなった。これにより久三はついに高石塔や自身の周りのすべてを美化し思慕することがもはやできなくなるのである。久三は大兼に対して抗議するが、彼は反対に久三をも高石塔が監禁されている小部屋に閉じ込める。

久三の監禁は小説全体の結末であり、また久三の最後の覚醒の瞬間でもある。彼は自分が「まるで同じところを、ぐるぐるまわっている見たい」（262頁）と感じており、ずっ

と高い塀の外におり、入ることができないように感じる。彼はまずそれは日本を彼の視野から遮る塀だと感じ、ひいてはついに彼の想像する日本は存在すらしていないのかもしれないと気づく。同時に、彼は自分の幼い頃の家の塀を夢みるが、その塀の中で小さな久三が母親の傍らでシャボン玉を追って遊んでおり、「無数の空と太陽が、金色に輝きながらくるくるまわっている」（262頁）のを見る。その塀の外では、すでに成長した、疲弊した久三がひそかにこれら一切を見ているが、内側に入る方法はない。久三は極度の苦痛を感じているものの、しかしこれはまさに彼が過去を否定し、自己を否定する始まりであったのだ。彼が塀の外に自分が遮られていると感じるのは、彼がついに塀の内側のすべてが虚偽なのだと思いますからである。過去に彼が想像した自己は、塀の内側の想像の中の日本の一部であり、あるいは幼い植民者として植民地の高い壁の中で過ごした懐かしい幼年の日々であった。そしてこの単純無垢こそ、まさしく植民地の悪を作り上げる隠された礎石なのである。この瞬間、久三はついに一貫して定義づけられてきた自らの単純無垢から離れ、一種の批判的で、自己否定的で、そのために無限の孤独や苦痛に満ちた境地にまで至ったのである。

小説の最後の一段では、彼が熟知するすべての人類共同体を否定した久三が野獣へと変わり、絶望的な反抗をはじめ、発狂したかのように傍にあった赤く錆びた鉄板を打ち始める。このように、久三は高石塔との道中同行の苦難を経験した後、ついに愚かで無援の少年植民者は暗黒と直接向き合う反抗者へと変身したのである。

久三が高石塔との同行のなかで見せた成長は、おそらく安部公房を含む多くの植民地で成長した少年植民者の心理変化の過程でもある。安部公房や彼と同じような経歴を持つ満洲出身の戦後の知識人は、みな自身の植民者としての身分に対して全くの無自覚であったところから深い反省に至るまでの過程を繰り返し語っている。小説と対照して読んでみると、久三と高石塔の同行物語は、まさにこの年代の日本知識人の心理変化の過程を語る寓言的な肖像であることが分かる。

異族同行の物語を通じて日本の満洲植民の暗部に深く踏み入ったのは、安部公房が最初ではない。満洲国時代における今村栄治の『同行者』は、被植民者の視点からこのテーマを描いている。今村栄治は本来朝鮮人であるが、満洲国で日本語を用いて創作発表し、日本人作家のコミュニティで活躍した。小説が描くのは以下の通りである。高度に日本化した在満朝鮮人青年の申重欽は、生活に迫られて都市から朝鮮人が集まって暮らす村落へ戻り、兄のもとに身を寄せようとする。その旅程で、彼は宿屋の主人から頼まれ、一人の日本人と同じ馬車に乗って同行する。まさに万宝山事件（1931年）の後であることから、申重欽は中国人の敵意を避けるため、わざわざ中国人の服に着替えて旅行をする。しかし同行の日本人は朝鮮人匪賊のほうをより恐れるため、朝鮮の服を着て旅に出ており、さらに申重欽の同行を取り付けて安全を確保していた。途中、果たして朝鮮人匪賊の群れが現れ、申重欽が対応に努めていると、日本人は申重欽が朝鮮匪賊と通じているのではないかと疑い始め、彼に拳銃を向けるのである。

多くの先行研究が『同行者』に示された在満朝鮮人のアイデンティティの危機について検討している。申重欽が田舎の親族に身を寄せるという旅行そのものが、この危機を集約して体現している。「朝鮮人として生まれていながら、朝鮮の風俗や習慣を毛ぎらひし、言葉さへ忘れかけて、日本人に習うとしてきた。そして今になって結局どちらにも容れられずに、両方から絶縁されて、原始的な、文化度のひくい満洲のへんぴなところへ追ひやられていく自分」（44 頁）、と。日本人と朝鮮人という二重の身分の溝のなかで生きる道を求め、申重欽は躊躇と苦悶を抱き、また超然たる態度で民族のアイデンティティ問題に対応できることを夢見ている。しかし、同行の途中で日本人に銃口と疑いの目を向けられたことにより、彼はたちまち悟ることとなる。満洲の他民族がなお民族の視点で彼を見るかぎり、彼が超然として民族の外に身を置くことなど不可能であるのだと。その瞬間、彼は自身の主体的な選択をしなければならなかった。「けれども今は、この両者のあひだに立って、ただくるしんだり喘いだりするばかりでは済まされなくなっている。せめてこの一瞬なりとも、自分の宙ぶらりんな立場を、はっきりと地につけねばならないのだ」（51 頁）、と。そこで彼はまず銃を日本人の手から奪い、その銃を使って日本人を制圧した後、さらにその銃を来襲してくる朝鮮人に向け、戦いに備えた。つまり彼は彼を差別する日本人と彼が認めない朝鮮人に対して二重の反抗を行うことにより、自らの位置を探し当てたのである。ただし、おそらく彼は自分がその時中国人の服を着たままであり、中国人の身分を演じていたことに気づいていなかったようである。

ある意味では、私たちは申重欽の姿に高石塔の影を見出すことができる。あるいは高石塔は申重欽の極端な表現形式であるのだ。満洲に生きる朝鮮人として、複雑な民族関係と階級化された植民体系によって彼らは自身の位置と身分を明確にできず、また民族としての自己の本質性を維持するすべがなく、異なる身分の間を渡り歩かざるをえない。これが申重欽の生存の条件であり、また高石塔のものでもある。ただ高石塔は軟弱を選ばず、自己のすべての能力と意思をもって植民体系を利用し、植民支配を超越しようとしたに過ぎない。しかしその結末はさらに悲惨なものになっただけであった。彼らにとって、少年植民者の久三と同じように自然で単純な態度で民族や個人の生活に対応することなど、実現不可能な贅沢であったのだ。久三がまだ無邪気な目で世界を見ていた時、彼が見た世界の人々は彼が属する集団の存在のために無邪気な目を失い、その世界の歪みと抑圧に直面することを余儀なくされていた。被植民者は植民時代にすでに問題に気づき、それを思索し始めていたが、植民者である安部公房と彼の同世代たちは、つらい戦後の引き揚げや長いポストコロニアルの再考を経てやっととどり着いたのである。そのため安部公房の物語と今村栄治の物語の間は二十年の間隔があいているのだ。

（中国語からの翻訳：羽田朝子）